

取り込みと患者予後の関係について検討した。162 例のうち 82 例では肝腫瘍は  $^{99m}\text{Tc-PMT}$  の強い取り込みを呈し (陽性)、残り 80 例では肝腫瘍は  $^{99m}\text{Tc-PMT}$  を取り込まないか、あるいは正常肝臓部と比べ同程度ないしそれ以下の取り込みを示した (非陽性)。患者予後は Kaplan-Meier 法および generalized Wilcoxon test を用いて解析した。陽性群 82 例と非陽性群 80 例の背景因子について検討した結果では、年齢、性、肝硬変の有無、child の分類、腫瘍径、血清アルブミン値および療法はいずれも両群の間に差を認めなかったが、血清ビリルビン値および AFP 値はいずれも非陽性群において高値を呈するものが多い傾向を認めた。陽性群 82 例の生存期間中央値は 1,013 日、これに対して非陽性群 80 例のそれは 398.5 日で前者が有意に長期間生存した ( $p < 0.002$ )。肝切除術を受けた 48 例のうち、陽性群 23 例の生存期間中央値は 2,317 日以上で、非陽性群 25 例の 1,567 日と比べ長かった。TAE 療法を受けた 85 例においても陽性群 41 例は非陽性群 44 例よりも有意に長期間生存した。さらに血清ビリルビン正常値群あるいは血清 AFP 低値群 ( $< 400 \text{ ug/ml}$ ) について検討した結果でも陽性群は非陽性群よりも長期間生存した。

以下の結論を得た。 $^{99m}\text{Tc-PMT}$  後期イメージングの成績は、肝細胞癌患者予後と密接な関係を有すること、および血清ビリルビン値および AFP 値とは独立して予後と関連する部分を有することを明らかにした。

#### 7. $^{123}\text{I}$ IMP 封入腸溶カプセルを用いた門脈血行動態の測定

塩見 進	黒木 哲夫	植田 正
池岡 直子	小林 絢三	(大阪市大・三内)
下西 祥裕	岡村 光英	小田 淳郎
越智 宏暢	小野山靖人	(同・放)

演者らは非侵襲的に門脈循環動態を測定する方法として経直腸門脈シンチグラフィを考案し、一連の検討を加えてきた。しかし、この方法では下腸間膜静脈からの門脈循環動態を測定できるが、上腸間膜静脈からの循環動態を反映しない欠点があった。今回、 $^{123}\text{I}$ -IMP (iodo-amphetamine) を経口および経直腸投与し、上腸間膜静脈および下腸間膜静脈両面からの門脈循環動態を同時に測定する方法を検討した。

対象および方法：慢性肝炎 11 例、食道静脈瘤合併

肝硬変 11 例、食道静脈瘤合併肝硬変 10 例の計 32 例を対象とした。IMP を封入した腸溶カプセルを経口投与し 3 時間後に 10 分間データ収集を行い、肝および肺の 30 秒毎の time-activity curve を作製した。さらに、直腸腔内に IMP を注入し 30 分間データ収集を行い同様に time-activity curve を作製した。

成績：経口による門脈シンチグラフィの肝および肺のカウントはすでに平衡状態に達しておりカウント数/(肺カウント数+肝カウント数) $\times 100\%$ を経小腸門脈シャント率とした。経直腸からの門脈シンチグラフィの肝と肺のカウント比は 20 分以降平衡状態に達するので、20-30 分の肺カウント数/(肺カウント数+肝カウント数) $\times 100\%$ を経直腸門脈シャント率とした。経小腸および経直腸門脈シャント率はともに病変の進展に伴い上昇傾向を認めた。慢性肝炎では両者間に有意差を認めなかったが、食道静脈瘤合併肝硬変では経直腸法は経小腸法に比べ有意のシャント率高値を示した。以上より、肝硬変の食道静脈瘤形成において、下腸間膜静脈経由の門脈血行は重要な役割を果たしているものと思われた。

#### 8. 腹部血液プール SPECT により描出された門脈瘤の 2 症例

福井 弘幸	柏木 徹	橋川 一雄
小塚 隆弘		(阪大・中放)
木村 和文		(同・バイオ研)
笠原 彰紀	佐藤 信紘	鎌田 武信
		(同・一内)

門脈瘤は非常に希な疾患であるが、われわれは、腹部血液プール SPECT 検査により門脈瘤が明瞭に描出された 2 症例を経験したので報告した。症例 1 は、34 歳の男性で右季肋部痛があり、腹部エコー検査にて肝門部に不規則に拡張した管腔様構造物を指摘された。腹部血液プール SPECT 検査は  $\text{Tc-}^{99m}$  in vivo 標識赤血球 740 MBq (20 mCi) を用い、1 方向 30 秒で  $360^\circ$  を 64 方向から楕円軌道にて撮像した。PSECT 像は、収集した像に low-pass と Wiener filter をかけた後再構成した。再構成された SPECT 像にて、肝門部門脈本幹上に明かな異常血液プール像が認められた。そして上腸間膜動脈造影門脈相にて門脈左右分岐の直前の径 3 cm の門脈瘤と診断された。SPECT の coronal 像は、transaxial 像である CT 検査より、門脈瘤の描出に適していると考えられた。症例 2 は、36 歳の女性、検診の腹部エコー検査にて